＜資料＞

医療的ケアにおける実地研修の現状と課題

今野多美子*、志水　　朱*、池森　康裕*、髙橋　由紀*、
志水　　幸*

抄　録：初めてA病院で行った医療的ケアの実地研修の内容と受講した学生及び指導者（看護師）からのアンケート回答、研修施設担当者と本学教員との検討事項から、実地研修の現状をまとめ、課題を明らかにするものである。学生 1 名に対して指導者 1 名の指導体制により、学生と指導者で相互関係が築かれ、指導者は個々の学生の特性を理解しながら指導された結果、学生は技術が身に付いたという実感をもつことができた。介護福祉士が医療的ケアを実施するには、法的な遵守を踏まえ、学生と指導者が相互に認識をもつ必要があり、教員は、この点を学生に指導教育するとともに、実地研修施設及び指導者に理解と協力を要請していくことが求められる。学生には、ケア技術だけにとどまらず、協力利用者（患者）への声がけや安全・安楽なポジショニングなどの演習内容の組み立てが必要である。また、臨床現場と同じ物品を整備することによって、学生の戸惑いを少なくし、より臨場感のもてる学内演習を行うことが必要であるなどの課題が明らかになった。

キーワード：医療的ケア　実地研修　指導看護師　介護学生　研修課題

Ⅰ．はじめに

2011年の社会福祉士及び介護福祉士法の改正により、介護福祉士の業務として喀痰吸引等が位置づけられ、介護福祉士養成施設の養成課程においても領域「医療的ケア」が加えられた。医療的ケアは、「医行為」であり、その法律的な理解をはじめ、チーム医療や医療の倫理などの修学により、介護福祉士等に一定の要件のもとに認められた技術である。

本学においては､2014年より「医療的ケア」を開講し、その翌年には選択科目として実地研修を行っている。そこで、初めてA病院で行った実地研修の実施内容と受講学生と指導看護師（以下「指導者」とする）によるアンケート回答、研修施設担当者と本学教員との検討事項をもとに実地研修の現状をまとめ課題について明らかにする。

＊臨床福祉学科 介護福祉学講座

Ⅱ．研究方法

1．対象者：研修を受けた学生 6 名、指導者 4 名
2．対象施設：A病院（療養病棟、障害者病棟）
3．期間：平成29年 8 月から11月
4．データ及びデータ分析方法：
①A病院での実地研修内容、②学生及び指導者からの自由記載によるアンケート回答、③研修施設担当者と本学教員との検討事項
①②③から得られたデータをもとに実地研修の現状をまとめ、課題を明らかにする。
5．アンケート内容
1）学生：①実地研修の期間や設定について、②実習場所について、③学内の授業は生かされたか、④学内演習との違い、⑤指導者について、⑥就職後の実施にあたり自信がもてたか
2）指導者：①実地研修の受け入れへの課題、②指導への苦労、③学内演習の効果、④研修前の学習を要すること、⑤病院で行う研修の意義、⑥介護福祉士の医療的ケアが実施できることへの意見

6．倫理的配慮

A病院看護部長、指導者及び学生に研究主旨について説明し、研究協力を依頼した。

研究参加は自由であること、参加しない場合でも所属する施設や学科より不利益を被らない、データは、匿名性を厳守すること、データ管理についても、ハードディスクに保存しないなど厳重に守ること、学会等に発表する、以上を文章と口頭で説明した。A病院看護部長から同意を得た。また、指導者と学生については、アンケートの回答をもって同意とした。

Ⅲ．結果

1．実地研修内容

・研修期間：５日間

・学生３名を１クールとして、２クール（男子学生３名、女子学生３名）

・指導体制：学生１名に対して指導者１名のマンツーマン　＊研修期間内に研修病棟の変更に伴い指導者の交代もあった。

・「喀痰吸引」「経管栄養」の対象者として施設側で選任された協力患者（以下「患者」とする）は、事前に文章と口頭により、研修施設担当者を介して同意書を得て実施した。

＊協力患者は、各ケアに４～５名。

・スケジュール：９:00～17:00（昼休み１時間）

・実施に当たって、指導者より学生に病名や障害等についての概ねの患者情報を説明された。

・指示書は、研修施設で用意されたものを使用した。

・ケアに必要な物品は、施設側のものを使用した。

＊プラスチックエプロン、吸引処置キット（吸引チューブと片手手袋のセット）、経管栄養加圧バック、ゴーグル、紙コップ、テッシュ（患者本人用）等の学内演習で使用していない物品があった。

・研修の最終日には、全体会が設けられ、施設側から看護部長･研修担当者･指導者、学校側から学生と教員が参加し、研修の振り返りと意見･感想などを話し合った。

・研修終了後に研修を行った施設長より、「医療的ケア実地研修修了証明書」の発行を依頼しており、受講学生全員に修了証明書が発行された。

2．記録物

・各ケアの手順に沿ったチェック票

ケア１回毎に指導者の確認を得て、学生が事後にチェックする。

・ケア実施記録

学生が実施前の主に技術面での留意点を記録し、実施後に自己評価を記録する。

１日１枚を目途に記録し、毎日研修終了時に指導者に提出する。

指導者がアドバイス等のコメントを記載した後に、学生に返却される。

指導者からのコメントを参考にし、翌日のケアに生かす。

・実施回数チェック表

ケア毎に何回実施したのか一覧でわかるもので、学生が事後にチェックする。

学生と指導者は、実施した回数を確認し進捗状況を把握する。

下記の写真は、学生が指導をうけながら経管栄養の準備をしている場面（図１）と経管栄養の加圧バックによる注入の場面（図２）を示す。

図１　経管栄養準備

図２　加圧バック使用

3．アンケート結果

1）学生アンケート

実地研修の期間設定については、５日間でもゆとりがあった。研修場所については、学生一人に対して一人の指導者の体制であったことで、短期間でもかかわらず実施に伴って技術が身に付いたなどの声であった。学内演習は、基本的な手順など演習が本番で生かされていた。学内演習と臨床現場との違いでは、臨床で使用している物品と同じ物を希望していた。経管栄養の手技について一部教科書にはない現場での具体的な方法についての回答もあった。指導者については、学生に対して優しく丁寧に具体的に指導されていた。さらに、的確な指導と患者に医療的ケアを実施したことで学生自身がケアをすることへの自信となったことがうかがわれた。

2）指導者アンケート

実地研修の受け入れについては、学生への１対１の指導のため指導者の確保と協力患者の確保の必要性と研修時期が看護職員の夏休み時期であり、勤務職員へ

の負担となっていた。指導者は、学生の技術的に合格ラインに達していても規定の回数をこなさなければならないこと。喀痰吸引について、介護福祉士が規定された吸引チューブの挿入の長さでは、喀痰を吸引されないことが多いこと。これらのように、看護師の立場からもどかしさを感じていた。学生から学内演習の効果があったとの声がきかれた一方で、指導者からは、吸引チューブの挿入時に吸引圧をかけずチューブを奥まで挿入していなかったとの指摘があった。学生が研修前に学習を要することについては、ケア時の患者のポジショニングや背抜き等の体勢を整える点が消極的であるとの指摘があった。病院で研修を行う意義については、学生が就職する介護施設での研修が望ましいとの意見があった。介護福祉士が医療的ケアを実施することについては、手技が確実になっていれば、多くの患者の安全を守ることができる。医療的ケアができる介護福祉士が増えることで、施設入所の適応範囲が広がるとの意見があった。

4．実地研修担当者と教員との検討事項

実地研修の終了後に、研修実地状況や全体会での意見、学生及び指導者アンケート結果を参考にして、実地研修担当者と教員による検討を行った。その結果、以下の5点について今後の課題及び改善点とした。

1）研修施設職員の休暇が多い時期を避けた今後の研修時期の検討

2）研修施設の指導者に対して、介護福祉士の医療的ケア実施への理解と協力を要請

3）学内演習時の臨床現場で使用している物品の整備
吸引処置キット（吸引チューブと片手グローブのセット）、プラスチックエプロン等

4）ポジショニングについて臨床現場をイメージした学内演習の取り組み

5）ケア実施記録に「一日のまとめ欄」の項目を追加修正

Ⅳ．考察

1．医療的ケアにおける技術の修得

学生1名に対して指導者が1名の指導体制がなされた。これにより学生は、学生の動作について、足りない点や注意点など1ケア毎に細かく指導されており、短期間にもかかわらず「実施に伴って技術が身に付いた」との声があった。学生は、実際の患者へのケアに緊張し、一連のケア手順において戸惑いを感じながらも、一つひとつ丁寧に指導されていく中、時間経過とともに緊張も解れてケアに集中していく様子がうかがわれた。学生は、同じ指導者が関わることによって、指導者との間で相互関係が築かれ、その結果、指導者への信頼と安心感がうまれた。指導者は、個々の学生の特性を理解しながら、声がけのタイミングや指導の内容、時には冗談を交わしながら、学生に合わせた指導を行っていた。このことから、同一指導者であるため指導方法が固定されたことで、学生は短期間であっても技術が身に付いたという実感をもつことができたと考える。

指導者から、「同じ内容の繰り返しだった」、「規定のチューブの挿入の長さでは、痰が引けてこないことが多かったため、実習としての意義が少ないように思う」との声があった。吉村･赤坂（2016）の医療的ケアの実施報告で、学生側から、「口腔内吸引の時習った“見える範囲”以上に吸引チューブを入れるよう指導を受けた」との状況があったと述べられている。このことから、ケアを重ね経験をすることで、学生の技術力が上達していることを確認すること。また、吸引チューブの挿入長さなどの法的な遵守を踏まえ、学生と指導者が相互に認識をもつ必要があると考える。教員は、この点を学生に指導教育するとともに、実地研修施設及び指導者に対しては、理解と協力を要請していくことが求められると考える。

2．学内演習の見直し

指導者から、「学生は、ケア時の患者に体勢、背抜きや足抜きなどのポジショニングに消極的だった」との声があった。介護福祉士養成講座「医療的ケア」の教本の内容では、経管栄養は体位を整えるケアとして半座位の姿勢とあるが、背抜きなどの詳細なポジショニングについては記載されていない。この点については、教員として改めて現場の状況を意識した演習のあり方を考える必要がある。ケア技術だけにとどまらず、協力利用者（患者）の心身状態の理解をしたうえで声がけや安全・安楽なポジショニングなどの配慮も修得できるような演習内容の組み立てが必要である。

学生は、学内演習と違う物品に研修当初、多少の戸惑いがあった。しかし、指導者の技術モデルを見せていただきながら、物品の取り扱いに慣れることができた。今後は、臨床現場と同じ物品を整備し、実地研修に入っても学生の戸惑いを少なくし、より臨場感のもてる学内演習を行うことが必要であると考える。

Ⅴ．結論

医療的ケアの実地研修の現状から課題として、以下の通りにあげられた。

1．1対1個別指導の研修体制を継続するためには、研修施設側と学校側の双方で可能な研修時期を検討する。

2．養成校は、法的な遵守を踏また介護福祉士が実施できる範囲の医療的ケア技術について、研修施設の看護職員に対して理解と協力を要請していく。
3．ケア技術だけにとどまらず、協力患者（利用者）の心身状態を理解したうえで、声かけや安全・安楽なポジショニングなどの配慮が修得できる学内演習の内容を組み立てる。
4．臨場感のもてる学内演習を行うために、臨床現場と同じ物品を整備する。

Ⅵ．おわりに

本学での医療的ケア実地研修は、今年度で3年目を迎えた。本来なら、介護施設で実地研修を行うことが望ましいが、介護実習先の施設では、介護職員の実地研修でさえ人員や研修時期などの厳しい状況であるとのことだった。そこで、長期療養型の病院へ依頼をしたところ看護部長はじめ管理者のご理解とご協力のもと実地研修を行えることとなった。学生にとっては、医療現場で研修することで、介護実習では経験できないことを多く見聞きすることができた。この点では意義が大きい。医療的ケアの実地研修修了したことが記された卒業生の介護福祉士登録証を見た際には、とても考え深いものがあった。

臨床現場で行っている喀痰吸引は、手順や使用物品などが簡素化していることや、経管栄養では、半固形化栄養剤の注入が主流となってきており、介護福祉士養成講座の教科書との違いがみられている。しかしながら、利用者の安全の観点から技術や手順は基本を守る必要がある。指導教育する教員は、医療的な時代に即した講義と演習の組み立てが求められる。

謝辞

本研究にあたっては、医療的ケア実地研修の受け入れとアンケートに快く協力いただきました病院の看護職員の皆さんに心より感謝を申し上げます。また、実地研修に臨み、アンケートに協力していただいた学生の皆さんにも感謝を申し上げます。

文献

赤坂昌子，尾台安子，丸山順子．（2013）．介護職員の喀痰吸引等研修における看護職の役役割と指導者講習の課題．松本短期大学研究紀要，22，13-24.
本間美智子．（2013）．介護福祉士養成教育における「医療的ケア」の導入．新潟青陵大学短期大学部研究報告，43，109-124.
加藤英池子．（2013）．介護福祉士養成教育を受けているＡ短期大学部学生の医療的ケアに対する履修意思．浦和大学･浦和大学短期大学部浦和論叢，49，27-44.
介護福祉士養成講座編集委員会．（2016）．新･介護福祉士養成講座「医療的ケア」．第3版，中央法規．相馬尚美．（2015）．「医療的ケア」教育に関する課題－実地研修指導者との連係を視野に－．別府大学短期大学部紀要，34，153-158.
植木明子，田川千秋．（2014）．「医療的ケア（喀痰吸引･経管栄養）ケア」の見学実習における課題について．長崎女子短期大学紀要，38，52-59.
吉村浩美，赤坂久子．（2016）．医療的ケア（喀痰吸引等研修）の実践報告．永原学園西九州大学短期大学部紀要，47，47-55.

Current Conditions and Challenges of Clinical Training in Medical Care

Tamiko KONNO*, Akemi SHIMIZU*, Yasuhiro IKEMORI*,
Yuki TAKAHASHI*, Koh SHIMIZU*

Keywords: OSCE, Assessment, Evaluation scale, Life support skills, External evaluator

* Pepartment of Social Work Practice, Social Care Services Course